

中を結ぶこの地は戦後、北陸線鉄道やトンネルの改修、また国道・高速道路の建設などで、静かな山村にも新生活文化の波が押し寄せ、年毎に洗濯機、冷蔵庫、テレビが普及してゆく様子が具体的に示されていて興味深い。

車は各戸に二台づつが普通で、息子と嫁さんは近くの金沢市やその他に勤めに出て、大坂さんのような老夫婦は「三チャン農業」を余儀なくされているが、ことに印象深いのは、戦前の部に「昭和〇年〇月〇日 何某 中支で戦死」と戦没者が列記されているのと対照的に、戦後は「〇年〇月〇日 何某 自動車事故で即死」といった記録がつづられていることで、一家の柱、働き手の不慮の悲劇が、今も絶えないのは暗然とするばかりである。

大坂さんは九死に一生を得て帰還され、余生を抑留体験者のため、戦友会のため、また隣人、町のために尽くされているが、兵隊の時は、迫撃砲大隊という「助っ人部隊」で、今日はあちらの歩兵連隊、明日はこちらの旅団へと助勢に出、散々こきつかわれて戦友

は半減した。やっと落ちついたところが北鮮という運の悪さ。ソ連に抑留されるために来たようなものだが、三年の辛苦に堪えて帰還されたのは、その人徳の致すところであろうか。ますますご自愛を祈ってやまないものである。

(石川県 永井 正三)

私の捕虜生活

—北鮮とシベリアと—

鳥取県 八津川 美 明

はじめに

「平和の礎」は副題の「シベリア強制抑留者が語り継ぐ労苦」が示すとおり、シベリア抑留記がほとんどであるのは当然のことながら、私にはシベリア抑留と同じくらい、入ソするまでの北鮮での捕虜生活の思い出が強く残っているので、それについても触れることとした。

終戦から三合里収容所に入るまで

終戦の日、昭和二十年八月十五日から数日間、平壤秋乙の朝鮮軍管区教育隊にいた私たち甲種幹部候補生約六百名は、敗戦という絶対信じたくなかったことが現実のものとなったことから、半ば虚脱状態で、ほとんどすることもなく、起きては食い、食っては寝るという生活を繰り返していた。終戦直後、教育隊の見習士官が、候補生の何人かとトラックに糧秣を積んで南鮮へ逃亡したという事件があった。その事件の直後、候補生全員、本部前に集合させられて、教育隊長の訓示を聞いた。その内容は、逃亡した連中は、たとえうまく内地に帰ったとしても、陸軍刑法は厳然として存在しており、彼らはそれによって厳重に処罰されるであらう。我々も間もなく内地に帰れる。だから絶対に輕率妄動はしないで帰国命令を待て、といったようなことだった。私たちはこの言葉を信じて、すぐに帰園できるものとばかり思っていた。部隊では被服倉庫、糧秣倉庫などが開放され、戦争に敗れながら、よくもまあこれほど残っていたと呆れるほどの新品の軍衣、襦袢、袴下、軍靴、靴下、また米や乾パン、缶詰等が

各自に支給され、だれもが皆これを持って内地に帰るのだと、背負いきれないほどの梱包をつくっていた。だれもが内地では物資が乏しく、少しでも多く持って帰りたいという共通した思いをもっていった。

八月二十日ごろだったろうか。初めてソ連軍の將校が本部前を歩いているのを見たが、それ一度だけであつた。そのころから候補生の中には、各地の在留日本人の保護、倉庫の警備、あちこちへの使役、あるいは將校宿舍の警備にと出かける者もいた。私も一週間ばかり三十名ほどの二個分隊で日本人保護警備のため、沙里院というところに出かけていたが、何事もなく帰って間もなく、八月の末近くだったが、候補生全員三合里に集結せよとの命令があつた。三合里は教育隊の近くで、何回か演習に行ったことがあつた。九月一日中に三合里の收容所に入らないと銃殺されるといううわさも広がつた。皆自分たちでつくった重い梱包を何とか三合里までは持って行きたいと、いろいろな工夫をこらしていた。私は他の二人の候補生とともに、將校集結地である三合里近くの弥勒洞に將校の行李を

運搬せよとの命令を受け、これ幸いと私たちの梱包も朝鮮人の引く牛車と一緒に積んで、八月三十一日の日が暮れてから出発した。

将校の行李をおろした後、何とか同じ牛車の馭者に頼んで、やっと九月一日の早朝三合里に到着した。しかし、三合里に近づいて本当に驚いた。収容所の入口付近は五十メートル四方くらいの広場になっていたが、そこに着いた途端、思わず「ウワー」という声が出た。何とその広場は被服、糧秣、武器、通信機具等が足の踏み場もないほど散らばっていたのだ。私たちがあれほど内地に持ち帰るのだと大切に運んで来た荷が、無残にもあたり一面に投げ出され、その上を踏んで行かなければ進めないのだ。

朝鮮のあちこちの部隊から、私たちと同じように重い荷を運んできた兵隊が、収容所に入る前にその荷を全部捨てざるを得なかったのである。収容所の入口にはソ連兵がいて、入ってくる兵の荷物を調べていたし、乗馬して見回っている兵もいた。もはや苦心惨たんして持ってきた荷を中に持て入れないことはわかり

切っていた。身の周りの物を少々と、糧秣は一週間分くらいしか持って入れないことを既に到着していた兵から聞かされた。万事休す。泣く泣く梱包を開いて、被服一揃いと米、乾パン、缶詰等を小さくまとめて荷物にした。

間もなく帰国できると信じていたから、捨ててしまふとかえってさっぱりした気になった。このようにして入口で一応点検を受けてから所内に入ったのだが、既に候補生の大半は入所しており、後から入ってくる私たちを待っていて、無事なのを喜んでくれた。もう既に三合里の建物という建物は、その下の土間まで朝鮮各地の部隊からきた兵隊でびっしり詰まっています。私たちは天幕を張っての生活しかなかった。何週間かはこの幕舎生活を強いられることとなった。

入所して一番哀れで今でも目に焼きついているのは、私たちが水を汲むため収容所内で一か所しかない井戸で水汲みの順番を待っていたとき、水をほしがって私たちの周りに訴えるような目で首を伸ばしながら寄って来た馬の群れであった。何頭かは既に倒れて、苦し

そうにもがいているのもいた。しかし、だれ一人として自分たちの汲んだ水を馬にやる者はなかった。何万人かの兵がいか所の井戸からしか水を求めることができなかつたのである。自分が飲むだけで精いっぱいなのだ。今でもあの時の馬の悲しそうな顔を思い出すと胸が痛くなる。

三合里に集結したのは、朝鮮平壤師団下の兵約三万人くらいだということは後で知った。これだけの大集団がこの三合里で生活していくこととなつたのである。

三合里収容所生活と入ソするまで

収容所に入つてしばらくの間は、糧秣は持参したもののしかなかつたし、幕舎生活も続いた。各自、自炊していたから、米を炊く薪も所内の木の葉や皮をはいでそれをあてた。終いには所内の木という木はなくなつて、被服を燃やしたこともあつた。糧秣はわずかだが支給されるようになった。勿論十分なものではなく、米から小豆、コーリヤン、粟、ひえ、とにかく食べられるものは何でもよかつた。雑炊にして、それに野草を入れたりした。そのうち糧秣のかっぱらいが始まるこ

ととなつた。この糧秣泥棒にかけては候補生は他の追隨を許さなかつた。同じ苦しみの中にある日本人同士がお互いの糧秣を奪いあうなどは許されることではないが、当時は食べることだけしか念頭になかつた私たちであつた。薪取りも始まつた。最初のころは近くの山だつたが、終いには一日がかりの大作業となつた。薪取りの時に逃亡事件も起きたりした。また、収容所から逃亡して捕らえられ、銃殺されるという悲惨な出来事もあつた。

最初三万人いた兵も、十月ごろから三合里を後に少し宛出発して行き、その中には多分シベリアへ送られたい者もいると思うのだが、宿舎もだんだん余裕ができ、幕舎生活から屋根のある倉庫、厩、そして兵舎に入ることができたのは十二月ごろだつたらう。食事も収容所全体の共同炊事で賄われるようになった。酷寒の中で越冬を終え、二十一年の春を迎えた。候補生の中には平壤市内へ長期にわたつて使役に出でいた者もあつたが、私たちは日帰りです市内の使役に出たり、ソ連軍の演習用陣地の壕掘り作業に従事していた。

五月ごろだったか、最後あたりまで残っていたと思われる候補生主体の部隊は、三合里から平壤郊外にある建物に移動し、平壤飛行場の使役に毎日通った。そして七月ごろその中の一部に、山中にある石湯温泉作業の移動命令が下った。森林伐採や丸太の貨車積み作業だったが、これも夏の間だけで再び平壤に帰った。この間石湯温泉を通過する、多分シベリアへ送られるだろう貨車積みの兵を幾度か見送った。

平壤に帰って、いよいよ帰国かと思ったのも束の間、千名ほどの大隊が編成され、貨車に積み込まれてシベリアへ送られることとなった。もはや、帰国の望みは絶えたとだれもが感じていた。北へ北へと進む貨車が時々停車する駅では、ほとんど婦人と子供の在留邦人が私たちを見送ってくれた。あの人たちはこれからどうなるだろうかと話し合ったものだ。豆満江を徒歩で渡ってソ連領へ入り、途中クラスキーで何日間かドイツ人捕虜と一緒になり、レール運搬作業をした。そして二日間、昼夜を問わず歩き続け、最後はまた、貨車でウラジオストクへ到着したのである。二十一年の

九月であった。

入ソ。ポポフ島―タフィン島―十四キロ

ウラジオストクでは五五三労働大隊が大きな収容所の建物に入っていたが、私たちの本隊が収容所に入る前に、約百名がポポフという島へ派遣されることとなり、私もその中に入った。他の候補生たちは収容所に入り、ここで彼らと別れることとなった。ポポフ島はウラジオストクから汽船で二時間くらいのところにある小さな島で、魚の缶詰工場があり、ここで作業をした。大きなタラバ蟹も処理した。夜になると漁船が魚や蟹を積んで港へ入ってくる。昼間の作業に加えての夜間作業であった。二人で前後を支える棒のついたナシルケという運搬具に魚を積んで工場に運び入れるのだが、その途中でナルシケ一杯分か二杯分をちよろまかして炊事場へ運び込んで、乏しい食料の足しにした。また、魚の中には大きな蛸も入っていて、ソ連人は蛸は食べないので私たちにくれた。長さが一メートル半近くもある大蛸を釜でゆでて食べることもあった。タラバ蟹の甲羅をはいで釜の中でゆでる作業では、

ゆで上がった足をもいで食べました。何しろタラバ蟹は両足を広げると一メートル以上もあるのです、足の四〜五本も食べると腹が一杯になった。時々ウラジオストックの本隊へ連絡に帰ることがあったが、その時には生の大きな蟹を俵に一杯詰めて、二袋くらい土産に持って帰ったものだ。本隊の収容所は大きな倉庫のような建物であり、その中には二段ベッドが並んでおり、この中で約千名が収容されていた。彼らは港から積みおろされる魚箱やたるの中から塩魚や缶詰をかってばらっていた。いわゆるカラプチである。

ポポフの収容所は百名が一緒に入れる大きな建物で、作業にもなれて落ち着いてくると、演芸会も行われるようになった。歌の上手なのが出て、いつも岡晴夫の「港シャンソン」を歌った。また私たちと合流する前にシベリア奥地から移って来た部隊で作詩作曲されたらしい歌もあった。シベリア奥地での労苦が偲ばれた。

北斗きらめくシベリアで

今日のしくさに打ち勝った

四中隊のつわものよ

希望の日までほがらかに

という歌詞と曲は今でも覚えていいる。また一人下士官の中に、いつもふてくされていて一筋縄でいかないのがいたが、だれかが幼い日の童話を歌ったら、こっそり人にわからぬよう涙をぬぐっていたのを見て、急に親しみを感じたこともあった。

収容所は小高い丘の上であり、歩哨は二〜三名で監視も緩やかなものだった。そして彼らはよく建物の中に入ってきて、私たちは身振り手振りを使って、また少し覚えたロシア語で話し合ったり、ふざけ合ったりした。近くに民家があって、作業に出ない日、鉄条網の近くにいたら、六歳くらいの可愛らしい女の子が寄ってきて「ダイミニア、カランダーン。カランダーン。ダイ」といって手を差し出した。カランダーンとは鉛筆のことだと知り、入隊のときから大切に持っていたなけなしの鉛筆をその女の子にやっってしまった。皆からお前は甘いと言われたことがある。その後その女の子とは仲よくなって、勝手に営門を出ては、その子をおぶって彼女の家に遊びに行つて、パンやスープ

をごちそうになつたこともある。ポポフ島から次のタフィン島へ移動するときには、泣きながら「ドスビダニヤ」と手を振ってくれた。

ポポフ島へ行つたときは九月初めで、まだそれでも暖かかった。休みの日の夕方、建物の裏の丘に寝ころんでみると、入隊前にラジオで覚えた「母の背は」という国民歌謡が本当に実感となつて迫つてきたものだった。

戦いに今日も暮れゆく

眠らんと草の葉しけば

思い出す母の背は

やわらかなりき

母の背に育ちし子等の

外つ国にありとは知らず

思い出す母の背は

あたたかかりき

歌詞もメロディーもよかった。今でも思わずくちびるにこの歌が乗つて出てきて、目頭が熱くなる。一つ歌を思い出して口ずさむと次から次へと懐かしい歌が

口をついて出てきた。私は三人の姉があつて、よくいろいろな歌を歌っていたから、割合多くの歌を覚えていたが、間もなく迫ってくるであろう冬と関連した雪、荒野、幌馬車、国境等の登場する歌が思い出された。「国境の町」「急げ幌馬車」「夕陽は落ちて」「夜霧の馬車」「涙の渡り鳥」等々、今日で言うナツメロである。その他の歌も数々。その次には童話や小学校唱歌の「冬の夜」「ふるさと」「砂山」「赤とんぼ」「叱られて」「この道」等々数限りなかった。思い出す歌を、所在のままに書き出してみると、百五十曲ばかりにもなった。不思議と軍歌は余り思い出すことがなかった。「麦と兵隊」「暁に祈る」だけはよく口ずさんだが。これは後日談になるが、ウラジオストックの本隊に帰つて歌わされた歌でも、革命歌よりもいわゆるロシア民謡の方が今でも強く頭に残っていて懐かしい。「ステンカラージンの歌」「灯」「バイカル湖のほとり」「バルカンの星の下に」、数多くある。

二十二年の一月ごろか、ポポフ島からタフィン島へ移動することとなった。小さな魚運搬船にぎゅうぎゅう

う詰め状態で乗せられ、凍った海を一昼夜かかってタフィン島へ到着した。ここで他の部隊と合流して人数も三百名ぐらいになった。作業はやはり魚工場で、他に氷割り作業があつて、一日中敵寒の凍った海の上でボールで穴をあけ、一メートル四角の氷塊を切り出す仕事をした。これは魚を夏に冷凍保存するためだったが、この作業は本當につらかつた。私たちは朝の集合の鐘を「地獄への招待鐘」と呼んだ。

ある時、私は氷の割れ目に落ち込んで、必死になつて泳いだことがある。幸い三月になつたところで、少しは寒さも和らいだところだからよかつたものの、敵寒の一月ごろだつたら、恐らく凍死してしまつたか、心臓麻痺を起こしていたかもしれない。奇妙なことにその時持っていたボールは、とっさに捨ててしまつたらよかつたらうに、助け上げられるまで持っていた。

その後、炊事班長にさせられたが、タフィン島の海辺では大きな昆布がとれるので、これを主食に混ぜて量をふやそうと、よく昆布とりに出た。ある日のこと、海に浮かんでいる氷の上に乗って昆布とりをしていた

ところ、気がつくと乗っていた氷が大分沖の方に流されており、あわてて海に飛び込み、冷たい水の中を腰までつかりながら必死で岸に帰り着いた。ある時は糧秣をソ連兵にネコババされ、そのため皆に迷惑をかけたということまで一日絶食させられたこともあつた。

タフィン島にも春が来ると、あちこちに野草が生えてくる。これもよくとりに行つた。また民家に寄つてキャベツの切れ端をもらつたりしたものだった。皆主食に混ぜたりした。

タフィン島から今度は山の中の十四キロというところに移動した。ここでは主として家づくり作業で、建築などには全然経験のない私たちが、二枚の板で囲つた隙間にコンクリートを運搬しては詰め込んでいく。そして上へ上へと詰めていっているうちに、いつの間にか二階建ての家ができ上がっていく。外から見るとまるで「ピサの斜塔」のように傾いている。よくも住居として使用できるものだと思つた。日本のような地震国ならたちまち崩れてしまうだろう。

十四キロでの作業中、ウラジオストク本隊の大隊

長と私の仲のよかった候補生とがやって来た。作業状況を見るためだったろうと思うが、どんな訳かわからないが、私一人だけが皆と別れて一緒に本隊に帰ることとなった。二十二年の九月ごろだったと思う。

ウラジオストックの本隊で

本隊の五五三労働大隊では、最初からこの大隊に入った候補生たちの大半は既に沿海州のソフガワニに移動してしまっており、残っていた候補生はわずかだったが、一年ぶりに再会してうれしかった。本隊に帰った私を驚かしたことは多々あった。以前ポポフ島から連絡に帰った時にはなかったのだが、中央奥には大きなステージがあり、その上にはレーニン、スターリンの大きな肖像画が掲げられていた。

二段ベッドは同じだったが、千名の兵が四つの分団に分けられており、中央には広い廊下があり、壁新聞が張られた衝立があり、図書館や理髪室まであった。しかし、何よりも奇異に感じたのは、一種の統制感、規律感とでもいうか、何かある枠があって、そこから抜けたり外れたりすることを許さない、無言の圧迫感

とでもいった雰囲気収容所全体にみぎっていることだった。これまで比較的野放図な生活をしてきた私には、最初のうちは今までの自由がなくなってしまうような気がした。前に連絡にきたときには、港から積みおろした魚や缶詰のカラブチが横行していたが、これはもうすっかりなくなっていた。図書室にはソ連共産党小史、マルクスレーニン主義の本、弁証法的史的唯物論等や数々のパンフレットがあつて、作業に出かけてない者が昼夜を問わず出入りして一心に勉強していた。勉強せざるを得ない空気があつたかのように感じた。私たちも確か、タフィン島にいたころだったが、日本新聞が時々配布され、私たちの知らなかった戦時中の多くの暴露記事や共産主義の宣伝、あるいは現在の日本の現状、ソ連の発展をたたえる記事、民主運動の啓蒙記事等が載っていたが、当時はそれを読んでもふーん、そんなものかくらいにしか考えず、読み捨てにしていたのだが、この収容所では皆が熱心に勉強しているようだった。

ハバロフスクの民主学校に行つて教育を受けた連中

が、アクチブと称してその指導に当たっているようだが、彼らは一種の特権階級みたいな感じで、余り労働には従事していなかったようだ。しかし、彼らに盾つくことは許されない感じがした。所内には指導部、演劇部、文芸部、音楽部等もあり、啓蒙運動を行っていた。考えてみると、私たちは子どものころから軍国主義一辺倒の教育を受け、戦争には必ず勝つと信じ込まされていたのが、敗戦、捕虜という余りにも劇的な変化の中で、実に簡単に百八十度の転回を受け入れやすい環境に投げ込まれて、そこに共產主義教育を注ぎ込まれてしまったのではないだろうか。もちろんシベリア各地では、その様相も様々だったであろうと思うのだけれども、五五三収容所では、このいわゆる民主運動が私が帰る半年以上も以前から行われていたようだが、定着の段階にあったようだ。

帰ってしばらくの間は茫然としていた私も徐々にこの生活になれ、箱打ちの作業に従事していた。文芸部にいた候補生から壁新聞に何か書けと言われて、率直にこれまでの生活と現在の生活を比較して書いたと

ころ、これが壁新聞に掲載され、こんなことから私は分団の文化担当たる役目を押しつけられ、分団の壁新聞の編集などやっていたが、間もなくプチブル的だということのでつるし上げをくらった。しかし、今思ってもわけのわからないつるし上げだった。こういった批判会は盛んに行われて、これまでの指導者が次々とおろされ交代していった。演劇部による啓蒙演劇も行われ、文芸部による映画会も度々開催された。どんな映画だったかほとんど記憶に残っていないが、「シベリア物語」だけは、はっきり覚えている。帰国してから日本で上映されたのを観にも行った。「バイカル湖のほとり」の歌も覚えた。

つるし上げをくらってからは文化活動の方には嫌気がさし、それまでは主として昼間の作業だったのを、当時労働の第一線に立って働くために組織されていた突撃隊に編入を希望し、隊長が仲のよかった候補生でもあり、以後はひたすら重労働に従事した。突撃隊は若い連中ばかりで作業は一番きつかった。カムチャッカから船で送られてくる魚箱、缶詰の陸揚げ、魚箱の

貨車積み、塩山作業が主であった。突撃隊の一番得意とすることは、貨車積み作業で、五十トン貨車に七十七キロの魚箱を七百箱ばかり、十二名で二時間くらいで貨車に積み込んでしまう。ハラシヨールポータであった。時には、百キロもある箱やたるもあったりの重労働だったが、皆で一緒にする作業だったから、だれもが弱音を吐くこともなかった。

突撃隊のする重労働作業はすべて昼夜三交代だった。つらかったのは塩山作業だった。これは沿海州から貨車で送られてくる岩塩を港の埠頭におろして山積みにする作業だが、山のように積み上げられた塩山のとっぺんで、下からコンベアで送られてくる岩塩をスコップで四方に散らす。ちよっとでもさぼっていると岩塩がたまってしまう、コンベアが動かなくなるから休み間もない。厳寒時の前半夜の塩山作業は特別につらかった。前半夜作業は夕方五時から始まる。零下何十度の中で、風は四方八方から容赦なく身を刺す。西に沈む太陽とともにあたりはだんだん暗くなり、港に入っている船には暖かそうな灯がともる。そして、ど

の船からも音楽が流れてくる。皆同じ音楽だった。メロディはすぐに覚えたが、帰国後「アガニョーク」(灯)というロシア民謡だと知った。貨車積み作業の場合は皆と一緒に作業できるが、塩山作業だけは一人ずつコンベアに割り当てられる。音楽を聞きながら一瞬の休みもなく、沈む夕陽と迫りくる夕闇の中で、感覚もほとんど感じぬかじかんだ手でスコップを動かす。すっかり暗くなってしまおうとさほど感じなかったが、宵闇がだんだんせまってくるころが一番切なかった。望郷の念にかられて涙が出ることもしばしばだった。

突撃隊の作業は他の人に比べると何倍もの重労働だったが、食事の量は変わらない。朝は米か雑穀が食器にストレス一杯と塩スープ、昼は作業場で食べるので黒パン一個、これはソ連の黒パンではなく、炊事でパン粉をこねてつくったパン、夕食は朝食と同じく米か雑穀にスープと鮭か鯖が一切れだけ。野菜といえは乾燥野菜だけ。ビタミンC不足のため、松葉を遠くまで採りに行き、それを小さく刻んでスープの中に入れて、目を白黒させながら飲んだ。

私は、北鮮の山の中にいたころ、盲腸らしき病状で発熱、下痢、嘔吐が三日二晩続いて、すんでのところで麻酔もなしに腹をきられそうになったことがあったが、ここでも原因不明の四十度近くの発熱のため医務室入室となった。しかし食欲は衰えなかった。食だけが桑しみの生活だったから、高熱も私から食欲を奪うことはできなかつたか。もっとも、帰国して一年もたずに病魔に倒れたのは捕虜生活の無理からきたのには違いないが。以前のようなカラプチはなかつたが、船の作業などで砂糖やメリケン粉などが袋からこぼれていたりすると我先にと拾って、水に溶いて、煙突の周りは熱かったからここにベタンと張りつけて焼いて食べたりした。朝夕食の分配のときにはだれもが目を皿のようにして、自分の食器に入る主食やスープが他人より少なくはないかと思張っていた。前半夜の作業のときは、朝八時ごろ隊に帰るのだが、朝食は既に分配してあるのを、空腹をこらえてそのまま眠って、昼食のときに二食分を一度に食べて、少しでも満腹感を味わえるようなこととした。衣と住の方はそれでもま

だましかったから、食の方にだけ、誰もの関心が向けられていたわけだ。入隊して教育隊に入るまで、同じ機関銃中隊で仲のよかった候補生が炊事班長をしていたが、彼は随分と苦労していた。お話にならない粗末な食糧配給でやりくりが大変だったのだ。

寒いシベリアも春が近づいてくると何となく浮きつきとした感じになる。五月一日のメーデーには炊事班長の工夫で、私たちが寄るとさざると話の種にしたいた白パンとポタ餅が配給された。彼の苦労が偲ばれた。だんだん暖かくなるにつれて、重装備の作業服で働いていたのも、作業しやすくなってくる。作業の能率も上がってきたようだ。帰国の話もまた皆の口の端に上るようになった。今度こそは大丈夫だろうと話し合った。

帰国、舞鶴へ

八月の半ばころだったか。作業中昼前だったが、急に作業中止して隊に帰れという命令が出た。いざ帰国だと皆喜び勇んで帰った。所持品といっても身の回りのわずかな物だが、整えて帰国命令を待った。いよいよ

よ出発、収容所を出てナホトカに向かった。ナホトカに着いても、ここからまたシベリア奥地へ送り帰されることもあると聞いて、戦々恐々の三日間を送った。

ナホトカの港に引き揚げ船の姿が見え、上陸名簿で自分の名前が呼び上げられたときの天にも上るような気持ち、乗船してやつと帰国できることが実感となって迫ってきた。船の名は「遠州丸」だった。そして二日の後、舞鶴の港へと入ったのだが、水平面以外に何も見えない海面に懐かしい日本の緑の山を見たときのうれしさ。ああ、やつと帰ったという思いで言葉も出ず、ただ涙にむせぶばかりだった。

終わりに

思えば、昭和二十年八月十五日、あの日から私たちの人生は思いもよらぬ捕虜という悲惨な生活に翻弄され続けた。抑留生活にも長短はあるが、ようやく祖国日本へ帰ったときの感激もつい昨日のように思い出される。私たち平壤教育隊甲種幹部候補生は、当時を振り返り現在を語り合うために昭和四十八年から「秋乙会」という全国大会を日本の各地で開き、今年はその

二十一回を迎える。抑留生活中の悲惨な思い出はいろいろ語ってもつぎることを知らない。私事にわたって恐縮だが、これは私の抑留について言えることだが、シベリア抑留者の大多数が食うや食わずで、厳寒のシベリアのあちこちで宿舍も与えられず、暮舎生活の中で重労働を強いられ、また懐かしい故国の土を踏むこともなく無念の死をとげられた人も多数ある中で、この人たちに比べると、重労働ではあったが、一応抑留の全期間を通じて曲がりなりにも屋根つきの宿舍で起居し、食糧も乏しくひもじい思いで終始過ごしたにもせよ、保障されていて、時には魚など腹いっぱい食べたこともある私など、他の候補生の語る話を聞いていて、申しわけない気がして、シベリア抑留者などと大きな顔はできない気がする。これはウラジオストックという港町近くにずっといたからであろうが。

私も生きている限り、秋乙会に出席して、語り尽くせぬ思いを語り合い、明日への生きてゆく活力としたいと念じている。それにしても、秋乙会の面々も齢既に古稀を迎え、毎年の全国大会に出席していた人の思

いがけない訃報を聞くのは悲しい。苦しい生活ではあつたが、またと得難い友もたくさん得た。この人たちは私の人生の宝物である。家族ぐるみの付き合いもしている。

最後に、今後の私たちシベリア抑留者の健康と幸福を心から願うとともに、かの地で無念の死をとげられた人々、帰国後今日に至るまで亡くなられた方々のご冥福を心から祈るものである。

【執筆者の紹介】

八津川美明氏は、小学校のころから秀才で、何事にも優れ、同僚の羨望の的でした。旧制の中学校から高等学校へ進みながら、戦局厳しく、学業半ばで現役兵として入隊いたしました。彼は軍隊、抑留生活を通じて模範生でした。

軍隊時代は私と同じ機関銃中隊で、甲種幹部候補生に先任で合格いたしました。機関銃の隊員というと、体格はもちろん、世にいう暴れん坊が多く、一筋縄ではいかない連中の集まりでしたが、彼は先任者として

よく統率し、難なきを得たことは衆知のとおり、同僚からの衆望厚く、将来を嘱望されておりました。

終戦後は彼とほとんど同一行動で、約一年間は北朝鮮でソ連軍指揮による労働に従事し、その後北上し、ウラジオストックにたどり着き、任務は多少違つたけれど、復員も同じく、いわば終始一緒だったといえます。

復員後は抑留中の重労働が原因で、体調を崩しながらも学究への思いは忘れられず向学心に燃え、東京大法学部に入學しましたが、無理がたたりやむなく中退の憂き目に遭いましたことは、余りにも無残で気の毒であつたと言ふしかないし、シベリア抑留が生涯を左右した証拠でもあります。

彼も静養後、教員免許を取得し、高等学校の教諭として活躍しながら、我々戦友会ではリーダーとしてよくまとめ、世話役として頑張ってくれております。

家庭は、一女を嫁にやり、夫婦仲よく趣味を生かし円満な生活で、毎日を楽しく元気に暮らしており、理想的な家庭であります。

筆者 八津川 美 明

生年月日 大正十四年七月十日

住 所 鳥取県米子市加茂町一丁目十八

一、昭和七年四月米子市義方尋常小学校入学

一、昭和十三年三月同校卒業

一、同年四月鳥取県立米子中学校入学

一、昭和十八年三月同校卒業

一、同年四月松江高等学校文科入学

一、昭和十九年九月同校在学中、朝鮮第四十三部隊第

三機関銃中隊入隊

一、昭和二十年七月平壤朝鮮軍管区教育隊入隊

一、同年八月十五日終戦

一、同年九月一日三合里収容所入所、各種作業に従事

一、昭和二十一年九月入所

ポポフ島、タフィン島、十四キロ、ウラジオス

トック労働五五三大隊で各種作業に従事

一、昭和二十三年九月復員

一、同年九月鳥取県日野郡八郷中学校奉職

一、昭和二十四年三月同校退職

一、同年四月東京大学法学部入学

一、昭和二十六年三月病気のため同大学中退

一、昭和二十九年四月鳥取県立米子東高等学校夜間部

に時間講師として奉職

一、昭和三十一年鳥取県立米子西高等学校に転勤

一、昭和三十二年五月鳥取県立根雨高等学校に教諭と

して転勤

一、昭和三十四年四月鳥取県立米子工業高等学校に転勤

一、昭和四十二年四月鳥取県立米子西高等学校に転勤

一、昭和五十四年四月鳥取県立米子南商業高等学校に

転勤

一、昭和六十一年三月同校定年退職

一、同年四月同校常勤講師

一、昭和六十三年同校退職

一、同年四月鳥取県立米子工業高等学校時間講師

一、平成元年三月同校退職

一、平成二年鳥取県立米子西高等学校時間講師

一、平成三年同校退職

(鳥取県 井上万吉男)